

2016年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

春日 由美
宮内 孝
古賀 隆一
金子 幸

はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターでは2010年4月以降、地域貢献と学生の学びを目的とし、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」などの活動を行ってきた(春日ら, 2016など)。「子育て支援室」は臨床心理士でもある学部教員1名が地域の子どもや子育てに関する心理相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育が専門の学部教員1名と学生ボランティアによる活動で、運動の苦手な子どもたちと保護者に運動遊びを体験してもらう活動である。「あそびの教室」は美術が専門の学部教員1名と学生ボランティアによる活動で、地域の子どもと保護者を対象にした工作遊びを体験してもらう活動である。これら3つの活動は、子育て支援センター開設当初から毎年継続している活動である。また2015年3月のトライアルを経て、2015年5月より、子育てひろば「みなみん」を本格実施している。さらに2016年9月より、障害のある子の保護者を対象とした心理サポート・グループ「リラ・フレッシュ」を学部教員1名と地域の子育てボランティアの方々と協働で行っている。「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「みなみん」では、学生がボランティアで参加することで、学内で実際に子どもや保護者と触れる機会になり、地域貢献と同時に、将来子どもに関わる仕事をを目指す学生たちの学びの場にもなっている。本報告では、2016年の「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動について報告する。

1. 子育て支援室

子育て支援室では、2015年までと同様に、大学の地域貢献を目的に子どもや子育てに関する相

談業務を行った。相談内容は、①子育てについて、②子ども自身の問題について、③親子関係について、としている。子どもの年齢は限定せず、保護者のみの相談や、教員の相談も受けている。スタッフは本学部教員1名(臨床心理士)である。相談は完全予約制で、毎週月曜日、13時から17時に行った。受理面接の予約は、都城キャンパスの事務部で電話を受け、その後担当教員が申込みの受付をし、受理面接日を調整して行っている。

毎週、継続中のケースや新規のケースにより、ほとんど予約は埋まっている状況であり、昨年以前より継続のケースを含めた2016年1月～12月の面接日数は39日、面接回数は延べ97回であった。大学での面接以外にも、2016年は2回、来談者の在籍学校において教員等とのケース会議も行った。2016年の相談内容は、子どもへの対応や育児不安、子どもの性格や行動等、不登校・園やその傾向についてが多かった。相談を受けた子どもの年齢は2015年以前からの継続ケースを含め、幼児から10代後半まで幅広く、男子12名、女子12名の24名に関する相談を受けた。2016年1月から12月の相談業務に関する統計資料および今後の課題は別にまとめる(春日, 2017)。

2. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」そしてテレビゲームやコンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思い切り動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が

未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、平成22年度より「チャレンジ運動教室」を開催した。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっており、その申込者はこの7年間で1542名である。

保護者、子どものそれぞれのねらいは、次のとおりである。

・保護者：子どもと一緒に「運動遊び」を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を積極的に設定して、子どもの心身の発達を促そうとする態度を育てる。

・子ども：「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思い切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

(2) 平成28年度の教室の概要

1) 参加申込者：268名

- ・幼児（5・6歳）とその保護者 89組
- ・小学校1・2年生とその保護者 45組

2) 実施回数：14回

- ・前期の部 5/21, 5/28, 6/11, 6/18, 7/9, 7/23, 7/30（計7回）
- ・後期の部 10/15, 10/22, 11/5, 11/12, 11/19, 12/10, 12/17（計7回）

3) 教室の内容

幼児の部は、走る、跳ぶ、投げる、捕る、支える、回る等の基本的な動きを取り上げて、それぞれの動きの体の動かし方や動きの感じを身に付けるようにした。

小学校の部は、3年生時から学習する「かけっこ」「器械運動」「ボールゲーム」などの運動につながる動きを取り上げて、その動きができるようにした。

各部とも、親子でやさしい動きから難しい動きへと挑戦できるようなゲームを多く取り入れて、課題とする動きが身に付くように配慮した。

4) 子ども教育学科学生の参加者：のべ290名参加
本教室参加を希望する学生が、授業科目「子ど

も支援地域活動」の一環として、参加した。教室開始1時間前に、子どもへのかかり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネジメントやつまづいている子どもへの支援を行わせた。教室終了時には、学生一人一人の反省や学びを話し合う事後指導を行った。学生にとっては、保護者や子どもとのコミュニケーションのとり方、子どもの発育発達の違いや運動指導法などについて体験的に学ぶ機会となった

(3) 今後の課題

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。

- ①参加者が多くなり、子どもや保護者のニーズが多様になっている。多様なニーズに対してどのように対応していくかを検討したい。
- ②一人一人の動きの変容の把握が、困難となっている。子どもの動きの変容を効率的に把握するための取り組みを考えていきたい。
- ③大学での授業の学びと本教室での学びとを有機的に関連づけるための手立てを検討する。

3. あそびの教室

地域の親子が参加できる活動として、2010年の学部新設年からはじめた本活動は、7回目である。2015年に引き続き「あそびの教室」第7回「創作子ども椅子を作ろう」を企画し、2016年10月29日（土）に開催した。この「あそびの教室」は、単に子どもを遊ばせるだけのイベントではなく、親子で活動に参加してもらうことで、①家に帰ってからも親子であそぶヒントになるような遊びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶことで、あそびによる成長と創造の楽しさや大切さを体験してもらうことを目的とした。また準備から当日まで、教員だけでなく学生も参加することで、学生のボランティア精神と創作教育につながることも目的としている。以下、第7回の取り組みである動物や昆虫、船や飛行機、樹木や家のダンボールによる遊具のあそびと、今回の工作テーマ「創作子ども椅子を作る」について報告する。

(1) スタッフと準備

人間発達学部の教職員4名と子ども教育学科1年生6名、が参加した。この活動への学生の参加は、授業科目「子ども支援地域活動」の一環でもある。

準備期間は2016年6月から10月までの間の内8月中旬～9月の夏季休業を除き、およそ3カ月間である。教員と学生で、会場に設置する段ボールと広告の紙で作った動く船や魚、樹木、子どもの家、動物（キリン、馬、犬、豚等）、昆虫（蟻、タワガタ、カブトムシ、）ゴジラ、ウルトラマン等の作品である。昨年のウルトラマンに続く作品で、本年度はドラえもん制作に取り組んだ。工作のテーマとしては犬やキリンといった特徴があって制作し易い工作を中心に、制作の提案を続けてきたが、子どもの心にインパクト、驚き、関心を喚起したいとの思いもある。当日は、親やスタッフが見本や子どもが遊べるような作品等を、課外の時間に制作した。動く玩具としてキャスターを取り付け、遊びの範囲を広げ、前年に引き続きコンパクトリヤカーを玩具のベースに使った本格的な動く玩具を試みた。また教職員が広報（都城市や三股町の広報課に協力戴く）、傷害保険の手配、FAXでの参加者の受付を行った。

(2) 当日の活動

「あそびの教室」前日の2016年10月28日（金）午後、1年の有志学生で体育館内に段ボール遊具の作品を搬入した。当日、2016年10月29日（土）は、9時から12時の間（3時間）、工作は本館4階の図工室、遊具あそびは体育館を使って実施した。参加者は幼児（5～6歳児を中心に3歳以上の未就学児）と小学生の親子4組、計16名であった。工作の内容は①段ボールをベースに子どもサイズの椅子の組み立て素材を、学生と教員で作ったものを準備しておく。②ダンボールや、広告の紙を2倍に薄めた接着剤（ボンド）を使って貼っていく張り子の技法である。①②共に教員から説明を行い、学生ボランティアは、主に子どものあそびのパートナーとして活動し、教員と学生も親子の工作を手伝った。乾燥の手間がかかるので時間内に終われるように、昨年より衣類乾燥機

と段ボールを利用した乾燥箱を考案したが、接着剤の使い過ぎで乾燥が間に合わないので、図工室で自然乾燥することにして、後日引き取りに来ていただくことにした。時間短縮のために、素材の制作と各部品は、学生ボランティアの事前の制作協力に支えられた。

(3) アンケート結果と今後の課題

親へ協力をお願いしたアンケート結果では、「楽しかった」「ためになった」「また『あそびの教室』にきたい」は回答者全員が「はい」という意見であり、「家に帰ってから、やってみようと思う」と「子どものことで、これまで気がつかなかった発見があった」に関してはやや消極的反応である。家庭では、素材の準備やスペースの問題と考えられる。しかし子どもが自由に使えるダンボール遊具での遊びは、参加者には非日常の有意義な活動になったと思われる。今後親が子どものことに注目しやすくなるような配慮や工夫することを更に検討したい。また自由記述項目では、楽しかった、家庭あそびの参考になった等の意見があった。また、今後も続けて欲しい、更に創造意欲が増したようだ、「家でも作ってみたい、段ボールでこんなことができるんですね。」という反応や、こんなに丈夫なものができるんですね。」等の意見もあった。

今年のテーマも初回より一貫して親子（幼児・児童）で関わる工作である。工作は大人が積極的にならないと幼児・児童の参加は難しい。ダンボールと紙を使うのは幼児・児童の遊びで大切な安全を、考えた材料である。素材の紙から様々なアイデアやイメージを創りだすあそびが工作の意味であり、親が制作をしている姿を幼児が見ながら僅かでもお手伝い参加とあそびに興じる姿をイメージして企画している。工作あそびは、本来制作しているその時間（過程）が“楽しい遊び”であるべきで、安易に結果（作品の出来不出来や、目的）を求めるべきではない。この活動は遊びを主体とした幼児・児童の参加に重きを置くもので、工作は親には頑張っている制作の姿を見せて欲しいと願うものである。今後の活動の要望も、幾つか新たな活動の提案もあり更に検討していき

い。一昨年度から活動内容の課題、進行の方法などの問題点を克服する為に、短時間ながら幼児造形のオリエンテーションを行い、子どもの自由画表現やあそびとしての工作の本来あるべき姿を説明し、工作は完成を目的とするのではなくプロセスの大切さ、試行錯誤の重要性といった幼児造形教育の理論を参加された保護者の方に解説した。「手を創造的に使おう。失敗も楽しい制作活動である。」というのが更に継続目標である。

今回は「あそびの教室」の7回目であったが、活動の参考になることがあり、更に次年度以降も活動を継続していきたい。

4. 子育てひろば「みなみん」

平成27年4月から「子ども・子育て支援新制度」がスタートし、必要とする全ての家庭が利用できる支援を目指し、各地で子育て支援の充実が図られている。本学でも子ども教育学科附属の子育て支援センターの取り組みの一環として平成27年5月から子育てひろば「みなみん」をスタートさせ、今年で2年目となる。地域の子育て家庭を支援すること、また、学生が乳幼児とその保護者とのかわりを学ぶ機会を作ることを目的に、取り組んでいる。2年目に入り、学生にも「みなみん」の活動への理解が深まり、より良い環境で子育て支援をしていこうと試行錯誤する姿も見られるようになった。今回は、平成28年1月から12月までの活動について報告をする。

(1) 実施の概要

①実施回数：計19回（1月～12月）

開設当初から、原則月1～2回、毎月開催することを目標としている。4月からは、隔週の火曜日を実施日と設定し、午前10時から12時までを開設時間とした。実施日の詳細は表1の通りである。

表1. 2016年の月ごとの開催日

月	開催日
1月	26日
2月	9日
3月	17日
4月	26日
5月	17日、31日
6月	14日、28日
7月	12日、26日
8月	9日、23日
9月	6日
10月	11日、25日
11月	8日、22日
12月	6日、20日

②利用者数

1月から12月までの計19回の実施で、利用した保護者の人数は延べ295人、子どもの人数は延べ352人であった。

③参加学生数

参加学生については、前期はボランティアとして自主的参加の学生が主であった。後期に関しては、ボランティアの学生に加え、子育て家庭支援論受講の3年生が輪番で参加をした。2年目の取り組みということもあり、ボランティア学生は昨年参加をした学生が多く見られた。また、後期の授業開始時に1年生向けに「みなみん」の活動の説明会を開催したことで、後期のボランティア学生の中には1年生が参加する姿も見られた。1月から12月までの計19回の実施で、学生の参加人数は延べ206人であった。

④運営スタッフ

子育て支援センターのパート保育士であるYさん、4年生のOさん、Sさんを中心として準備、運営を行った。学部教員も適宜参加をし、学生へのアドバイスや保護者から相談があった場合には対応ができる体制をとった。

(2) 取り組みの実際

毎回、実施日の1週間前に参加学生が集まり、準備会を行った。準備会には子育て支援センター

のパート保育士であるYさんにも加わっていた
だき、学生へアドバイスをお願いした。準備会では、お楽しみ会の役割決めや手作りおもちゃの作成、既存のおもちゃの消毒、壁面構成等、実施日に向けての準備に取り組んだ。また、実施の案内・広報に関しては、行政（都城市・三股町）や近隣の子育て支援センター等にポスターを掲示、地域の情報誌に実施の様子を掲載、ラジオ出演による開催日の案内等、様々な方法で地域住民への周知を行った。

お楽しみ会では、パネルシアターやペープサート、からくり絵本の読み聞かせ（夢を叶える塾にて制作）、ダンス、わらべうた等、学生の趣向を凝らした内容で実施した。

実施当日は、学生は9時に集合し、環境構成、最終確認を全員で行った後、10時から12時までの親子の来館に臨んだ。開放している間の利用者の出入りは自由とした。その後、運営スタッフ、参加学生全員で反省会を実施し、次の活動の参考にできるようにした。活動の流れは表2の通りである。

表2. 活動の流れ

時間	内容
9:00～	学生集合 →環境構成（受け入れ準備、掃除等）、お楽しみ会のリハーサル
10:00～	親子の受け入れ →受付、子どもの名札を作成
11:30～	お楽しみ会 →パネルシアター、ペープサート、からくり絵本、わらべうた 等
12:00～	片付け
12:10～	一言反省会

2年目の取り組みということもあり、学生が積極的に意見を出し合い、活動に取り組めた。実際、今まで使用していなかったロビー部分に「お絵かきコーナー」や「粘土コーナー」を作り、子どもが遊び込める環境構成を行ったり、子どもの名札を色画用紙で動物や花などにしてみたり等、子どもが楽しく参加できる環境を心掛けていた。また、保護者にとっても利用しやすい環境を目指し、授

乳室に授乳クッションを置く等、試行錯誤して取り組んでいる様子が見られた。

(3) 今後の課題

2年目の取り組みでは、中心となる学生を2名配置したことで、より良い子育てひろばを目指し、試行錯誤しながら実施をすることができたと言える。また、子育て支援への学生の関心が深まり、積極的なボランティア学生の参加も見られた点は評価できるが、1年生の参加が少なかったことが課題である。大学内にある施設として、1年次から学生の参加を促し、実践を通して乳幼児への理解と保護者へのかかわりを学んでほしいと願っている。そのための活動や参加しやすい雰囲気を作っていくことが今後の課題である。

5. リラ・フレッシュ

2016年9月より月1回の頻度で、障害のある子の保護者の支援を目的とした「リラ・フレッシュ」（リラックスとリフレッシュを合わせた造語）を行っている。この活動は、地域で子育てボランティア活動をされている2名の方と本学部教員1名（臨床心理士）が中心となり行っている活動である。現在は1時間程度、教員がファシリテーターとなり、参加された保護者（現在まですべて母親）が日頃気になること、人に聞きたいこと等を、子どもに関わることに限らず自由に話すピア・カウンセリング的な活動を行っている。

毎回、4～7名の方が参加しており、毎回参加している方もいる。各回の参加者数を表3に記す。話されている内容は、子どもの出産からこれまでの子育て、園や学校等について、家族のこと等様々である。また保護者が話をしている間、ベテランの子育てボランティアの方々が子どもたちの託児をしている。

表3. 月ごとの参加者数

月	人数
9	7
10	4
11	4
12	4

参加者にとっては託児があり、子どもたちと少しの時間でも離れることで、自分と向き合い、ゆっくりと話したり、考えたりする時間になっていると考えられる。参加者からは、「座って、お茶を飲みながら話をするのは何年ぶりだろう」「子どもと少しでも離れる時間があるがたい」などの言葉が聞かれ、日々の生活では得られない貴重な時間になっていると考えられる。また子どもの年齢が少しずつ違っていることで、子どもの年齢が上の保護者が、子どもの年齢が下の保護者に就園・就学等に関する疑問や不安に答えることもあった。参加している母親たちは子どもを出産して以来、生活は180度変わり、ゆっくりと寝ることさえもままならない状況が数年続く場合もある。話の中で、「父親の方は（子どもが生まれる前と後で生活は）変わらないけれど」という言葉が聞かれることもある。障害のある子を育てる母親たちは、子どもを出産した後は子どものためにとずっと走り続けたままの状況が続いていく。今年度より開始した本活動が、月に1回、1時間というわずかな時間であるが、走り続けている母親たちのほんのわずかな休憩の時間になることを期待している。

まとめ

人間発達学部附属子育て支援センターの5つの活動について2016年度の取り組みを報告した。上記で報告したように、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」「みなみん」「リラ・フレッシュ」のそれぞれは、各教員がそれぞれの専門性を活かした地域貢献の活動になっている。また学生にとっては、ボランティアで多くの子どもや保護者と関わる中で、子どもや保護者支援を行いながら、自分を成長させていく活動になっている。一方でこれらの活動は未だ十分に地域に知られていないという現状もある。支援を必要としている、あるいは活動に参加したいという方が各活動につながるために、今後更にこれらの活動を地域に知らせていくことも必要であると考えられる。

2016年から始まった「リラ・フレッシュ」は、大学以外の地域の子育てボランティアの方と協働

で行っている活動である。本学部が2010年に開設されて以降、様々な場面で教員や学生が地域の方と交流を重ね、地域に根付いた学部になっていると思われる。今後はそれらのつながりを生かしながら、教員や学生といった大学内の人材だけでなく、地域の方々や卒業生との協働などへの活動の広がりも期待される。

引用文献

- 春日由美・宮内孝・古賀隆一・金子幸・黒川久美 (2016) 2015年度人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 6, 121 - 125.
- 春日由美 (2017) 2016年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 7, 137 - 140.